

[研究ノート]

ノスタルジアが自己連続性に与える影響⁽¹⁾

津村 健太

問題

ノスタルジアとは、過去に対する思慕 (sentimental longing) の感情である (Wildschut, Sedikides, Arndt, & Routledge, 2006)。近年、ノスタルジアが持つ心理的影響について心理学の分野においても関心もたれ、実証研究が行われてきている (e.g., Juhl, Routledge, Arndt, Sedikides, & Wildschut, 2010; Routledge, Arndt, Sedikides, & Wildschut, 2008; Wildschut et al., 2006; Zhou, Sedikides, Wildschut, & Gao, 2008)。本研究では、過去から現在にかけて同じ自己が時間的に連続しているという感覚、すなわち自己連続性にノスタルジアが及ぼす影響を検討する。

ノスタルジアとは

ノスタルジアは過去に対する思慕の感情で、例えば、自らが過去に経験した出来事を想起したときに喚起される (Wildschut et al., 2006)。日本語における懐かしいという感情におおむね一致するものと考えられる (cf. 楠見・松田・杉森, 2009)。ノスタルジアを感じる出来事を想起した際に感じていた感情は、ネガティブな感情が含まれる場合も多いが、ポジティブなものが大部分を占めており、ノスタルジアは主としてポジティブな感情であると考えられている (Wildschut et al., 2006)。

近年、ノスタルジアの心理的帰結に関心が集まっており、心理学実験を通じてその影響について検討されている。例えば、ノスタルジアを感じる出来事を想起した参加者の方が、日常的な (ordinary) 出来事を想起した参加者よりも、自尊心が高まっていた (Wildschut et al., 2006)。また、Zhou et al. (2008) は一連の実験や調査を通じて、(a). ソーシャルサポートの知覚が弱まると孤独感が強まる、(b). 孤独感が強まるとノスタルジアが喚起されやすくなる、(c). ノスタルジアが喚起されると、ソーシャルサポートの知覚が強まる、といったプロセスを示した。そのうち、研究3では、ノスタルジア条件の参加者はノスタルジアを感じる出来事を、統制条件の参加者は日常的な出来事を想起した。実験の結果、統制条件の参加者よりも、ノスタルジア条件の参加者の方が、知覚されたソーシャルサポートが高かった。これは、ノスタルジアを感じる出来事の多くが、大切な他者が関わる出来事であり (e.g., Wildschut et al., 2006)、ノスタルジアを感じることで自身の人間関係を想起するためである (e.g., Kumashiro & Sedikides, 2005)。

さらにノスタルジアが、死すべき運命は避けることができないという存在論的な恐怖 (cf. Terror Management Theory, Greenberg, Pyszczynski, & Solomon, 1986) に対する心理的なバッファとして機能することも示されている (Juhl et al., 2010; Routledge et al., 2008)。ノスタルジアは過去の重要な出来事や大切な他者との相互作用などの記憶を源泉としている (e.g., Wildschut et al., 2006)。そのため、ノスタルジアを感じることで生きる意味を確認でき

(Routledge, Arndt, Wildschut, Sedikides, Hart, Juhl, Vingerhoets, & Schlotz, 2011)、存在論的脅威に対するバッファとなると考えられている。

ノスタルジアと自己連続性

本研究は上記の影響に加えて、ノスタルジアが自己連続性を回復させる可能性について検討する。外見、性格や信念など、時の流れの中で人は様々な変化を経験する。その一方で、過去から現在にかけて、同じ自分が連続している、という感覚も持っている。この感覚が、自己の連続性と呼ばれているものである (Sani, 2008)。この自己連続性はアイデンティティを構築する上でも重要な要素であり (e.g., Erikson, 1959 小此木訳 1973)、私たちにとって不可欠なものである。しかし、私たちは常に自己の連続性を感じられるわけではない。例えば自己概念が変化したときなどは、過去の自分と現在の自分が同じであるとは思えず、自己連続性を感じられなくなる (Lampinen, Odegard, & Leding, 2004)。そして、自己の不連続な状態に陥るとネガティブ感情が高まったり、深刻なケースでは自殺などの心理的不適応との関連が指摘されている (e.g., Chandler, Lalonde, Sokol, & Hallett, 2003; Lampinen et al., 2004; Milligan, 2003)。こうした知見をふまえると、自己不連続な状態は決して望ましいとはいえない。そこで本研究は、ノスタルジアによって自己連続性が高まるかどうか、実証的に検証することを目的とした。

ノスタルジアが自己連続性を高めると最初に議論したのは、社会学者の Davis であった (Davis, 1979 間場・細辻・萩野訳 1990)。彼は、自己不連続な状態に陥った時にノスタルジアを感じることで連続性が回復されると論じた。それでは、なぜノスタルジアによって自己連続性が高まるのであろうか。この点について考えるうえで重要な、ノスタルジアの特徴が2点ある。

1つ目が、ノスタルジアを感じる出来事は、個人にとって重要で、かつ、自己をよく反映していると感じられる点である。ノスタルジアを感じる出来事は、日常的な出来事やポジティブな出来事と比較して、本来性の感覚 (sense of authenticity)、つまり、その出来事が本当の自己を反映していると感じる程度が高い (Stephan, Sedikides, & Wildshut, 2012)。なぜならば、ノスタルジアは、過去の重要な出来事や大切な他者との相互作用などの記憶が源泉となっており、人生に意義を与えてくれる (Routledge et al., 2011; Wildschut et al., 2006) ためである。

2つ目が、ノスタルジアを感じる出来事と現在とのつながりの強さである。ノスタルジアを感じる出来事についての記述は現在とのつながりに関する言及が多く、心理的な近接性 (psychological proximity) が高かった (Stephan et al., 2012)。これは、ノスタルジアは、現在から過去への思慕の念であり、過去と現在の (暗黙の) 比較、あるいは、過去から現在に対する示唆を含む、といった特徴を持つ (Hart, Wildschut, Arndt, Routledge, & Vingerhoets, 2011; Hepper, Ritchie, Sedikides, & Wildschut, 2012; Sedikides, Wildschut, Arndt, & Routledge, 2008) ためである。また、ノスタルジアを感じることで、過去の記憶やポジティブな自己像へのアクセサビリティが高まる (川口・佐藤・伊藤・波多野・大塚, 2011; 小林・岩永・生和, 2002; Vess, Arndt, Routledge, Sedikides, & Wildschut, 2012) ことも示されている。

以上から、ノスタルジアを感じると、本当の自己を反映していると感じられる重要な過去が、現在の自己との心理的な近接性を持って想起され、現在の自己と結び付けられるようになると考えられる。そのため、自己連続性が高まると予測される。しかし、著者の知る限りでは、ノスタルジアが自己連続性に与える影響について、心理学実験を用いて検討した研究は行われていない。

そこで、本研究はノスタルジアを感じることで自己連続性の知覚が高まるか、2つの実験を通じて検討した。また通常、多くの人は、自己連続性を保持していると考えられる (cf. McAdams, 2001)。そこで本研究では、自己連続性が一時的に低くなった状態においてノスタルジアを感じると自己連続性が回復されるという側面に着目し、自己の変化への知覚を高めると考えられる手続きを条件に関わらず含めることとした。また、ノスタルジアはポジティブな感情であるとされている (Wildschut et al., 2006) ため、単純な感情のポジティブティによって自己連続性が高まっているという代替説明を排除するため、対照条件として (ノスタルジアではない) ポジティブ感情を喚起させる条件を設定した。

実験

予備調査

本研究では、ノスタルジアを喚起させる手段として音楽を用いた (e.g., Barrett, Grimm, Robins, Wildschut, Sedikides, & Janata, 2010; 川口他, 2011; 小林他, 2002)。そこで、実験に先立ち、ノスタルジア喚起音楽およびポジティブ感情喚起音楽の選定のために、予備調査を実施した。

調査協力者は一橋大学の学生17名 (男性8名、女性9名、年齢 $M=18.65$, $SD=0.79$) で、協力者にはおよそ1分に編集した7曲の音楽を聴いてもらい、音楽聴取時の感情についてそれぞれ評定を求めた (5件法)。予備調査の結果、最もノスタルジア得点 (“なつかしい” の1項目) が高かった音楽 (井上陽水の少年時代) を、ノスタルジア喚起音楽とした。また、ポジティブ感情項目 (“明るい”、“楽しい”、“陽気な”) の3項目の合算平均、 $\alpha_s > .52$ の得点が高く、かつノスタルジア得点が低い音楽 (Jan Van der Roost の Flashing Winds) を、ポジティブ感情喚起音楽とした。

各得点について対応のある t 検定を行った結果、ポジティブ感情喚起音楽 (ノスタルジア得点 $M=2.55$, $SD=0.59$; ポジティブ感情得点 $M=4.06$, $SD=0.73$) よりもノスタルジア喚起音楽 (ノスタルジア得点 $M=4.47$, $SD=0.86$; ポジティブ感情得点 $M=2.35$, $SD=0.72$) の方が、ノスタルジア得点が高く、かつポジティブ感情得点が低くなっていた (All $t_s(16) > 9.4$, $ps < .001$, $\eta^2_s > .85$)。

また、音楽によって過去の記憶が想起されるか確認するため、音楽を聴いて思い出した出来事について記述を求めた。その結果、参加者17名のうち、特定の出来事を書いていたのは、ノスタルジア喚起音楽では12名 (70.6%)、ポジティブ音楽では4名 (23.5%) だった ($t(16)=3.77$, $p < .01$, $\eta^2 = .47$)。

実験1

実験参加者 実験参加者は、一橋大学の学生46名 (男性27名、女性19名、年齢 $M=19.0$; $SD=1.2$) であった。46名の参加者をランダムに条件に割り当てた結果、ノスタルジア条件の参加者は23名 (男性11名、女性12名)、ポジティブ条件の参加者は23名 (男性16名、女性7名) となった。

手続き 参加者には、言語処理と映像視聴の関連についての研究であると説明し、言語課題に取り組んでもらった後に映像を見てもらうことを伝えた。

はじめに参加者は、自己の変化への知覚を高めることを目的とした乱文再構成課題に取り組んだ。乱文構成課題は全9問で構成されていたが、このうち6問が過去から現在にかけて自己が変化したことを示唆するような文章 (e.g., “今の私はもはや過去の私ではない”) であった。

課題後、1回目の自己連続性評定に回答してもらった。用いた尺度は Ersner-Hershfield, Garton, Ballard, Samanez-Larkin, & Knutson (2009) において現在と未来の自己連続性を評定するのに用いられていた尺度で、未来の自己を過去の自己に変更して用いた。この尺度は全4項目から構成されており、初めの2項目は、過去と現在の自分がどのくらい似ていると思うか、およびどのくらい強く結びついていると思うかについて尋ねた項目であった。参加者は、過去の自己と現在の自己を表す2つの円が、重ならず接している状態から、ほぼ完全に重なった状態まで、円の重なりを7段階で設定した選択肢の中から回答をした。この2項目は、Aron, Aron, & Smollan (1992) の IOS (Inclusion of other in the self) 尺度を基に作られたもので、過去の自己と現在の自己にどの程度の一体感を感じているか、あるいは過去の自己が現在の自己と同じ存在であるとどの程度感じているか、を測定しているものである。残りの2項目は、過去の自分のことをどのくらい好きだと思うか、およびどのくらい大切だと思うかについて、7件法のリッカート尺度で回答するものだった。

続いて参加者は、映像を視聴した。映像のBGMの種類によって、喚起感情の条件分けが行われた。ノスタルジア条件ではノスタルジア喚起音楽、ポジティブ条件ではポジティブ感情喚起音楽を用いた。視聴した映像はこの実験のために用意したオリジナルのもので、自然の風景や建物の景観を写した写真のスライドショーだった。

映像視聴後、参加者には2回目の自己連続性測定、および映像に関する質問に回答してもらった。2回目の自己連続性測定は、1回目と同じ尺度を用いた。さらに、実験に関するアンケートへの回答を求めた。回答後にはディブリーフィングを実施し、実験を終了した。

結果と考察

留学生1名、および 実験後のアンケートの回答において実験意図への気付きが見られた6名を分析から除外した。その結果、参加者はノスタルジア条件20名 (男性10名、女性10名)、ポジティブ条件20名 (男性13名、女性7名) となった。

自己連続性尺度4項目を、映像視聴前の1回目の測定 (T1) と、映像視聴後の2回目の測定 (T2)、それぞれ合算平均して過去の自己連続性得点とした (T1 $\alpha = .66$; T2 $\alpha = .75$)。自己連続性得点に対して2 (喚起感情: ノスタルジア条件 vs. ポジティブ条件) \times 2 (時間: T1 vs. T2) の分散分析を行った (Figure 1)。その結果、喚起感情と時間の交互作用のみが有意 ($F(1, 38) = 4.61, p < .05, \text{partial } \eta^2 = .11$) で、喚起感情および時間の主効果はいずれも有意でなかった ($F_s < 1, \text{n.s.}, p \eta^2_s < .02$)。単純主効果検定の結果、ノスタルジア条件において、T1 ($M = 4.99, SD = 1.06$) よりも T2 ($M = 5.20, SD = 1.13$) の方が、自己連続性が高い傾向が見られた ($F(1, 38) = 3.17, p = .083, \text{partial } \eta^2 = .08$)。他方で、ポジティブ条件では、T1 ($M = 5.46, SD = 0.91$) と T2 ($M = 5.31, SD = 1.19$) で有意な差は見られなかった ($F(1, 38) = 1.58, \text{n.s.}, \text{partial } \eta^2 = .04$)。また、T1とT2のいずれにおいても、ノスタルジア条件とポジティブ条件の間で有意な差は見られなかった ($F_s < 2.4, \text{n.s.}, \text{partial } \eta^2_s < .06$)。

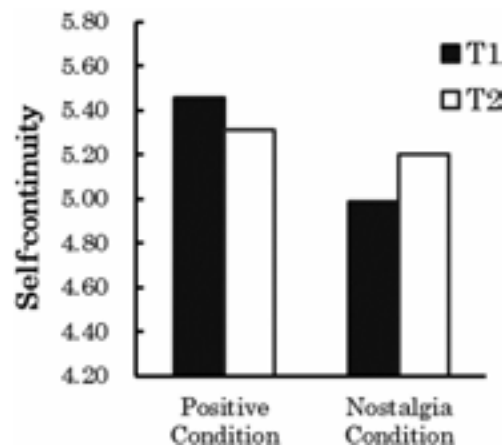


Figure 1. Self-continuity as a function of condition and time of self-continuity rating in Experiment 1 (7-point scale)

Note. T1 = before each emotion was induced; T2 = after each emotion was induced.

以上より、ノスタルジア条件においてのみ、自己連続性が感情喚起前の T1 よりも感情喚起後の T2 の方が高くなっており、仮説に沿った結果が得られた。しかし、有意な差は見られなかったものの、ポジティブ条件の方がノスタルジア条件よりも自己連続性得点が高くなっているパターンが見られた。また、自己連続性の測定を 2 度実施することで実験意図に気付かれやすかった、T1 と T2 の相関が高くなってしまう ($r = .87, p < .001$) などの問題点が考えられた。そこで実験 2 では、自己の変化への知覚を高める手続きを変更した。また、連続性の測定を感情喚起後のみとし、ノスタルジアが自己連続性に与える影響について再度検討した。

実験 2

実験参加者 実験参加者は、一橋大学の学生 41 名（男性 22 名、女性 19 名、年齢： $M = 19.0, SD = 0.8$ ）であった。41 名の参加者をランダムに条件に割り当てた結果、ノスタルジア条件の参加者は 20 名（男性 11 名、女性 9 名）、ポジティブ条件は 21 名（男性 11 名、女性 10 名）となった。

手続き 参加者には、映像の視聴と個人的特徴との関連についての研究であると説明し、2 つの映像を見てもらい質問に回答してもらおうと伝えた。

はじめに参加者は、幾何学図形を用いた映像を視聴した。この映像は、参加者の自己の変化への知覚を高めることを目的としていた。映像は全体で 1 分ほどの長さで、10 種類の幾何学図形が画面の左側から 1 つずつ現れ、画面中央に配置された灰色の長方形の背面を通り、画面の右側へと流れて行く様子を映したものだ。それぞれの図形は、灰色の長方形の背面を通過する間に、図形の色や形、大きさなどが様々に変化し、画面の右側へと消えていった。人は、人間や生物に対してだけでなく、運動する図形に対しても、意図、感情、パーソナリティなどの心的な状態を帰属させる傾向がある (for a review, 龍輪, 2007)。本研究では、変化する図形から心的な状態の変化を見出し、そこから自己の変化への知覚も高まるのではないかと想定した。

続いて参加者は、実験 1 で用いた映像を視聴した。実験 1 と同様に、風景映像の BGM によって感情喚起の操作が行われた。映像視聴後、自己連続性尺度、および映像に関する質問に回答した。自己連続性尺度は、実験 1 で用いた 4 項目のうち、自己連続性をより直接的に測定している

と考えられる2項目のみ（過去と現在の自分がどのくらい似ていると思うか、およびどのくらい強く結びついていると思うか）を用いた。その後、実験に関するアンケートへの回答を求め、ディブリーフィングを実施し、実験を終了した。

結果と考察

実験後のアンケートの回答において、実験意図への気づきが見られた2名を分析から除外した。その結果、参加者はノスタルジア条件20名（男性11名、女性9名）、ポジティブ条件19名（男性11名、女性8名）となった。

自己連続性尺度2項目を合算平均して自己連続性得点とした ($r(39) = .46, p < .01$)。自己連続性得点に対してt検定を行った (Figure 2) 結果、ノスタルジア条件 ($M = 4.95, SD = 1.04$) の方がポジティブ条件 ($M = 4.21, SD = 1.17$) よりも自己連続性得点が高くなっていた ($t(37) = 1.78, p < .05, d = .67$)。この結果は仮説と一致するもので、ノスタルジアを感じることで自己連続性の知覚が高まることが示された。

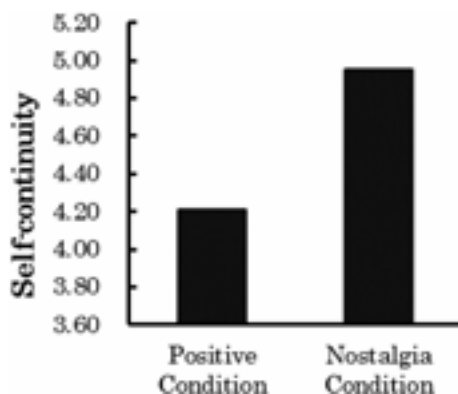


Figure 2. Self-continuity as a function of condition in Experiment 2 (7-point scale)

総合考察

本研究は、ノスタルジアを感じることによって、過去から現在にかけて同じ自分が連続しているという感覚、すなわち自己連続性が高まるかどうか、実証的に検討した。実験1では、ノスタルジアを喚起された条件の参加者では、ノスタルジアを喚起される前よりも喚起された後の方が、自己連続性が高くなっている傾向が見られた。他方のポジティブ感情を喚起された条件の参加者では、ポジティブ感情の喚起の前後で自己連続性に変化は見られなかった。実験2では、ポジティブ条件よりもノスタルジア条件の方が、自己連続性が高くなっていた。これらの結果は、本研究の仮説に沿ったものであった。

ノスタルジアがもたらす心理的帰結に関する研究が多く行われている。しかし、Davis (1979 間場他訳 1990) が論じた、ノスタルジアによって自己連続性が高まるという議論については、これまで実証的に検討されてこなかった。自己連続性とノスタルジアの関連について実証的に検討した点において、本研究には一定の意義があるだろう。

また、自己不連続な状態は心理的な不適応をもたらす恐れがある (e.g., Chandler et al., 2003; Lampinen et al., 2004; Milligan, 2003) が、連続性を高める方法については、明らかにされてこなかった。自己不連続な状態では、単に過去を思い出すだけでは連続性を得にくい可能性がある。なぜならば、現在の自己像とは一致しないような過去の出来事を想起した場合には、その出来事が自分の体験ではないように感じられる傾向があるためである (佐藤, 2008)。本研究は、そのような状況にあってもノスタルジアによって自己連続性を高めることができる可能性を示している。

しかし、本研究はいくつかの限界点も抱えている。1つ目として、参加者が自己連続性について評定する際に、どのくらい昔の自己を想定していたのか、本研究では統制できていない、という点が挙げられる。これは、ノスタルジア喚起音楽によって想起される出来事や自己像がどのくらい昔のものであるか、参加者によって差が生じうると考えられ、連続性評定の際に想定する過去の自己を特定できなかったためである。想定した過去の自己との時間的な距離によって、感じられる連続性の程度は異なってくると予測される。実際、想起した出来事が昔の出来事であるほど、感じられる自己連続性の程度が低くなる、ということが示されている (Lampinen et al., 2004)。この点について、実験2では、すべての質問項目への回答が終了し、ディブリーフィングを行う前に実施したアンケート内で、自己連続性評定においてどの過去の自分を想定していたか、参加者に尋ねていた。参加者はいつの自己を想定していたか、“小学生未満”、“小学生”、“中学生”、“高校生”、“高校生以降”、“特になし”、の6つの選択肢の中から選んだ。この質問の回答について、カイ二乗検定を行った結果⁽²⁾、小学生の頃を想定していた参加者の人数が、ポジティブ条件 ($n=2$) よりもノスタルジア条件 ($n=7$) の方が多い傾向が見られた ($\chi^2(2)=4.85, p=.088$)。すでに述べたように、遠い自己を想起するほど自己連続性が感じられにくいいため、ノスタルジア条件の方が自己連続性得点が低くなると予測される。しかし、実験の結果はこの予測とは一致せず、むしろノスタルジア条件の方が自己連続性が高くなっていた。いつの自己との連続性を回答していたのか、条件間で時期に違いが見られていたものの、実験2の結果はその違いからは説明のできないものであった。

また、ノスタルジアによって自己連続性が高まるプロセスについても、本研究では検討できていない。Lampinen et al. (2004) は、過去の出来事について、その当時感じたであろう感覚や感情などの主観的経験 (subjective experience) が、自己連続性を確立させる上で重要な役割を果たしているだろう、と論じた。ノスタルジアと関連の深いエピソード記憶の特徴は、メンタルタイムトラベルが可能であること、つまり、その出来事を再体験するかのようでありありと思い出し、その出来事は自ら体験した出来事であるという感覚が生じる点にある (for a review, Tulving, 2002)。そのため、ノスタルジアにおいても、過去の出来事についての主観的経験が伴うと予測される (cf. 川口, 2011; Stephan et al., 2012)。主観的経験と自己連続性、主観的経験とノスタルジアの関係については、著者の知る限りではこれまでに実証的に検討されておらず、今後の検討課題である。

本研究では、自己不連続性が高まった状態において、ノスタルジアを感じることで自己連続性の知覚が高まる、という側面に着目した。そのため、いずれの実験においても条件に関わらず、自己の変化への知覚を高めるための手続きを行った。しかし、本研究で用いた手続きは、そのどちらも試み的に用いられたものであり、自己連続性への影響は検討されていない。実験では、

自己の変化への知覚を高めると想定された手続きを経ても参加者の自己連続性は比較的高く、本
当に変化への知覚が高まっていたのかは明らかではない。今回の実験では参加者の自己不連続性
が高まっているとは言えなかった。実際に自己不連続性が生じた際に、連続性を回復させること
ができるのか、結果の適応可能性については判断に慎重を期するだろう。この点についても、更
なる検討が必要である。

注

- (1) 本稿は、著者の平成23年度修士論文（一橋大学大学院社会学研究科）を加筆修正したものである。成果の
一部は、日本社会心理学会第53回大会において発表された。
- (2) “小学生未満”または“高校生以降”と回答した参加者はいなかった。また、“特になし”と回答した参加
者（ $n=5$ ）は分析から除外した。

引用文献

- Aron, A., Aron, E. N., & Smollan, D. (1992). Inclusion of other in the self scale and the structure of
interpersonal closeness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 596-612.
- Barrett, F. S., Grimm, K. J., Robins, R. W., Wildschut, T., Sedikides, C., & Janata, P. (2010). Music-evoked
nostalgia: affect, memory, and personality. *Emotion*, **10**, 390-403.
- Chandler, M. J., Lalonde, C. E., Sokol, B. W., & Hallett, D. (2003). Personal persistence, identity development
and suicide: a study of native and non-native north american adolescents. *Monographs of the Society for
Research in Child Development*, **68**, vii-130.
- Davis, F. (1979). *Yearning for yesterday: A sociology of nostalgia*. New York: Free Press. (デーヴィス, F. 間
場寿一・細辻恵子・荻野美穂 (訳) (1990). *ノスタルジアの社会学* 世界思想社)
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: International Universities Press. (エリクソン, E. H.
小此木圭吾 (訳) (1973). *自我同一性——アイデンティティとライフ・サイクル——* 誠信書房.)
- Ersner-Hershfield, H., Garton, M., Ballard, K., Samanez-Larkin, G., & Knutson, B. (2009). Don't stop thinking
about tomorrow: Individual differences in future self-continuity account for saving. *Judgment and Decision
Making*, **4**, 280-286.
- Greenberg, J., Pyszczynski, T., & Solomon, S. (1986). The causes and consequences of a need for self-esteem: A
terror management theory. In R. F. Baumeister (Ed.), *Public self and private self* (pp. 189-207). New York:
Springer-Verlag.
- Hart, C. M., Sedikides, C., Wildschut, T., Arndt, J., Routledge, C., & Vingerhoets, A. J. J. M. (2011). Nostalgic
recollections of high and low narcissists. *Journal of Research in Personality*, **45**, 238-242.
- Hepper E, Ritchie TD, Sedikides C, Wildschut T. (2012). Odyssey's end: Lay conceptions of nostalgia reflect its
original Homeric meaning. *Emotion*, **12**, 102-119.
- Juhl, J., Routledge, C., Arndt, J., Sedikides, C., & Wildschut, T. (2010). Fighting the future with the past:
Nostalgia buffers existential threat. *Journal of Research in Personality*, **44**, 309-314.
- 川口潤 (2011). ノスタルジアとは何か——記憶の心理学的研究から—— *Juncture*, **2**, 54-65.
(Kawaguchi, J. (2011). What is nostalgia?: from psychological studies of memory. *Juncture*, **2**, 54-65.)
- 川口潤・佐藤綾香・伊藤友一・波多野文・大塚幸生 (2011). ノスタルジア感はどのように生じるのか：反応時

- 間を指標として 日本認知科学会第28回大会発表論文集, 134-138.
- (Kawaguchi, J., Sato, A., Ito, Y., Hatano, A., & Otsuka, S. (2011). What is underlying process of nostalgia? : An experimental study using reaction time measure. *Proceedings of the 28th Annual Conference of the Japanese Cognitive Science Society*, 134-138.)
- 小林麻美・岩永誠・生和秀敏 (2002). 音楽の“懐かしさ”と感情反応・自伝的記憶の想起との関連 広島大学総合科学部紀要 IV 理系編, **28**, 21-28.
- (Kobayashi, A., Iwanaga, M., & Seiwa, H. (2002). Relations of nostalgia with music to emotional response and recall of autobiographical memory. *Memoirs of the Faculty of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University. IV, Science reports: studies of fundamental and environmental sciences*, **28**, 21-28)
- Kumashiro, M., & Sedikides, C. (2005). Taking on board liability-focused feedback: Close positive relationships as a self-bolstering resource. *Psychological Science*, **16**, 732-739.
- 楠見孝・松田憲・杉森絵里子 (2009). 広告と消費者心理——単純接触効果による安心感とノスタルジア——基礎心理学研究, **28**, 142-146.
- (Kusumi, K., Matsuda, K., & Sugimori, E. (2009). Advertisement and consumer behavior : Sense of safety and nostalgia by mere exposure effect. *The Japanese Journal of Psychonomic Science*, **28**, 142-146.)
- Lampinen, J. M., Odegard, T. n., & Leding, J. K. (2004). Diachronic disunity. In D. R. Beike, J. M. Lampinen, & D. A. Behrend (Eds.), *The self in memory* (pp. 227-253). New York: Psychology Press.
- McAdams, D. P. (2001). The psychology of life stories. *Review of General Psychology*, **5**, 100-122.
- Milligan, M. J. (2003). Displacement and identity discontinuity: The role of nostalgia in establishing new identity categories. *Symbolic Interaction*, **26**, 381-403.
- Routledge, C., Arndt, J., Sedikides, C., & Wildschut, T. (2008). A blast from the past: The terror management function of nostalgia. *Journal of Experimental Social Psychology*, **44**, 132-140.
- Routledge, C., Arndt, J., Wildschut, T., Sedikides, C., Hart, C. M., Juhl, J., Vingerhoets, A. J. J. M., & Schlotz, W. (2011). The past makes the present meaningful: Nostalgia as an existential resource. *Journal of Personality and Social Psychology*, **101**, 638-652.
- Sani, F. (2008). Introduction and Overview. In F. Sani (Ed.), *Self continuity: Individual and collective perspectives* (pp. 1-10) . New York: Psychology Press.
- Sedikides, C., Wildschut, T., Arndt, J., & Routledge, C. (2008). Nostalgia: Past, present, and future. *Current Directions in Psychological Science*, **17**, 304-307.
- 佐藤徳 (2008). 想起された出来事の時間的距離判断ならびに所属判断に影響を及ぼす要因の検討 パーソナリティ研究, **16**, 416-425.
- (Sato, A. (2008). Self concept and subjective temporal distance and memory ownership. *The Japanese Journal of Personality*, **16**, 416-425.)
- Stephan, E., Sedikides, C., & Wildshut, T. (2012). Mental travel into the past: Differentiating recollections of nostalgic, ordinary, and positive events. *European Journal of Social Psychology*, **42**, 290-298
- 龍輪飛鳥 (2007). 運動図形のアニメーションを用いた心的帰属研究の展望 京都大学大学院教育学研究科紀要, **53**, 313-324.
- (Tatsuwa, A. (2007). A review of research on mental attribution using animation of moving figures. *Kyoto University Research Studies in Education*, **53**, 313-324.)

Tulving, E. (2002) . Episodic memory: from mind to brain. *Annual Review of Psychology*, **53**, 1-25.

Wildschut, T., Sedikides, C., Arndt, J., & Routledge, C. (2006). Nostalgia: Content, triggers, functions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **91**, 975-993.

Zhou, X., Sedikides, C., Wildschut, T., & Gao, D. G. (2008). Counteracting loneliness: on the restorative function of nostalgia. *Psychological Science*, **19**, 1023-1029.

[査読を含む審査を経て、2015年4月10日掲載決定]

(一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程)